

2017年度 関西学院中学部 学校評価を終えて

幼稚園から大学院まで連なる総合学園としての関西学院は、その良さを生かし、お互いに連携をとりながら整合性のとれた学校評価を実施するため、接続する学校の教職員の先生方に専門的な視点からのご意見をうかがうことで、第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」を導入しています。この度、中学部の学校評価が関西学院評価推進委員会において承認されましたので、ホームページ上で公表させていただきます。

2017年度は、連続性を見るために引き続き「教育課程・学習指導」「生徒指導」「保健管理」「保護者との連携」「キリスト教主義教育の実践」「特色ある教育の実践」を評価項目に設定し、評価の実施にあたっては、各項目について生徒・保護者・教員にアンケート調査を行い、それぞれの立場からのご意見を聞くことによって客観性を確保しました。アンケートの回収率は、生徒 96.9%、保護者 66.9%、教員 100 %となっております。

今年度も各項目について、まず現状を説明し、アンケートの集計結果も参考にしながら評価・分析を加え、今後の改善に向けた方策を示し、自己点検・評価としました。また、評価者の先生方に、ありのままの姿の中学部の教育を知っていただき、寄せられたご意見も合わせて中学部の学校評価としてまとめています。

関西学院中学部は、学校評価を通じて自らその課題を探り、それに向き合って改善することによって、より内容のある教育活動等を生徒に提供し、また、その結果を社会に公表することによって信頼を高め、課題意識を共有していく所存であります。

2017年度中学部の学校評価を項目別にまとめたものを、以下に掲載いたします。

今後とも、各部門において改善に努めていく所存ですので、どうぞよろしくお願いいたします。

2018年3月9日
関西学院中学部
部長 安田栄三

学校評価

教育理念・使命・目標

中学部がめざす教育の目標

- キリスト教に基づいた伝統ある人間教育を土台とし、「感謝・祈り・練達」の教育理念を大切にして、人の痛みをわかろうとする人間、他者を尊重し将来に夢を持って社会に貢献できる人間を育てる。
- 建学の精神を体得した生徒を育てることにより、高校、大学、さらに社会に出てから、隣人と同時に世界に目を向けることができる、リーダー的役割を果たせる人間を育てる。

2017年度の評価項目

- ①教育課程・学習指導：全生徒に対して中学部がめざす水準の基礎学力を定着させるとともに、学力上位生徒に対して、興味関心に応じた発展的学習を行うため、学習課程の精査や教授力の向上をめざして設定している。
 - ②生徒指導：生徒の社会的資質や行動力を高め、学校が生徒にとって有意義で興味深く充実したものになることをめざして設定している。
 - ③保健管理：生徒の身体面、精神面にかかわる項目として設定している。
 - ④保護者との連携：生徒を育てるには学校教育と家庭教育に一貫性がなければならない。そのため保護者と教職員の連携が密になるように設定している。
 - ⑤キリスト教主義教育の実践：建学の精神としてのキリスト教主義教育の充実をめざし設定している。
 - ⑥特色ある教育の実践：中学部の特色として重点的に展開している授業や行事等の充実をめざし設定している。
- 以上の6項目。

2017年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導 【教育課程についての教員間の共通理解と連携】	自己評価	B
目標	教員による教育課程の全体像の理解		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ●以前から継続的に「学習ガイドブック」を作成し、生徒だけでなく、教員間でも教科目標、学習法等の共通理解が得られるようにしている。 ●定期試験、学力推移調査、GTEC、全国学力・学習状況調査等の結果およびその分析を全教員で共有しつつ、自分の教科だけでなく、他教科の目標、学習活動のあり方についての共通理解の形成をしている。 ●組担任だけでなく、当該学年の授業担当者の情報交換会を通じ、各教科の授業や生徒個別の状況について情報交換を行っている。 ●アンケート結果では、教員アンケート質問1「教員が教育課程の全体を理解している」の項目について、昨年度、肯定的評価が85%を超えていたのが、今年度は約20%低下している。 		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ●従前からの取組を継続的に行うと共に、教科間での情報や意見の交換の機会をさらに増やしていく。 ●教員へのアンケート結果を踏まえ、肯定的評価が低下したことの要因を早急に探っていく。また、外部試験だけでなく、中学部自体の学力基準を確立し、教科間、教員間での共通理解の向上を図る。 		

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導 【生徒の学力・体力の的確な把握】	自己評価	A
目標	外部テスト導入などをおとした学力のより客観的な把握／教員による学力や体力評価についての理解向上		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ●定期試験のみでなく、各教科で小試験、課題提出、口頭試問等を実施し、個別生徒に関して、細やかに学力やその推移を把握している。 ●前述のとおり、学力推移調査、GTEC等を導入し、客観的な学力把握に努めている。加えて、英語検定、漢字能力検定等の受験も勧め、生徒個人が達成度を明確な形で確認できるようにしている。 ●外部テスト等の実施状況は後退していないにもかかわらず、教員アンケート質問2「客観的な学力把握に努めている」の項目について教員の肯定的評価が、昨年度より10%弱下がっている(77.8%)。 ●生徒は約80%、保護者は約90%が、学力を適切に評価されていると感じており、この状況はここ数年来変わっていない。 		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ●従来どおり、細やかな学力把握の機会を設け、生徒の学力を評価するとともに、その状況を個々の生徒自身が認識し、自分の目標とできるようにしていく。 ●生徒らに対し、試験結果をフィードバックする際、その結果、数値の持つ意味をより明確に伝え、個々の生徒の経時的な変化に注目させる機会を積極的に作っていく。 		

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導 【各教科の特性に応じた授業の工夫】	自己評価	A
目標	教員自身による担当教科の特性の理解／より質の高い授業をめざしての教員による不断の研究／授業研究の成果を活かしての授業への不断の創意工夫		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ●生徒アンケート質問5「授業はさまざまな工夫が加えられていて分かりやすい」で76.6%が授業での工夫、わかりやすさについて肯定的評価をしているのは、ここ数年来変わっていない。ただ、生徒の学力差が大きくなるなか、どの層に焦点を当てて授業構築をするかが、困難な問題となっている。 ●全教員に対し、自己研修の時間と研究費用を確保し、教授力の向上を図っているのは従前どおりであり、それが個々の教員の資質の確保につながっている。 ●各教科で基礎学力の確保とともに、応用的、発展的範囲にも多くの時間を割き充実した学力の涵養をめざしている。 ●教員アンケート質問3「自らが担当する教科の特性を理解している」で、教員自らの教科の特性理解については、ここ数年来、約95%の肯定的評価、今年度は97.2%の肯定的評価がある。それに対し、教員アンケート質問4「質の高い授業を目指して、授業研究を不断に行っている」、教員アンケート質問5「授業研究の成果を活かし、授業の創意工夫を行っている」、教員アンケート質問6「知的好奇心の喚起に留意した授業を行っている」の3点については、肯定的評価が約80%である。これは各教員が自分の努力に対して謙抑的な評価をしているとともに、教科教育以外の学級経営・生徒指導・クラブ活動等に多くの時間を割かねばならず、十分な授業研究の時間が確保できないことに原因があると思われる。 		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ●引き続き、教員の自己研鑽の機会を確保するため、校務の整理、効率化を図る。 ●教員間で教授法に関する情報交換、共有を図るとともに、特に経験豊富な教員が若手教員に指導・助言する機会を積極的に作っていく。 		

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導 【個々のニーズや興味関心に応じた授業展開】	自己評価	B
目標	知的好奇心の喚起に留意した授業の展開／補習など特別な学習機会の提供／中学部と高等部との連携		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ●先述のとおり、応用的、発展的学習内容にも多くの時間を割き、興味関心のある生徒の要求にも応えられるよう努力している。 ●英語では、分割授業を実施し、生徒の学力に応じた授業を展開している。 ●基礎力を確保するため、数学、英語を中心に遅れのある生徒には適宜、補習を行っている。また、夏期休暇中には教職教育研究センターの協力を得て、大学生のボランティアによる学習指導会を設けている。 ●適宜、特に定期試験前は、自宅学習の習慣が確立していない生徒のため、各学年で学習会を行い、自学の機会を確保している。 ●補習が適切に行われているかの問に対し、生徒の 84.6%、保護者の 73.0%が肯定的評価をしているが、ここ数年来その割合は少しずつ低下している。学力差が広がり、到達度の低い生徒が増加傾向にあることがその要因と思われる。 		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ●学習意欲が高く、高い学力を持つ生徒の期待に応えることと、到達度の低い生徒に対応するという、相反する要求に対応することは困難であるが、英語以外でも分割授業や習熟度別授業の導入を引き続き検討する。また、それを実現するための裏付けとなる種々の条件整備が必須である。 		

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導 【課外活動の充実】	自己評価	A+
目標	生徒会など自治活動の充実／クラブ活動など課外活動の充実／課外活動が正課（学習）を妨げていないことの徹底		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ●生徒アンケート質問1「学校に行くのが楽しい」、質問2「中学部の教育に満足している」、保護者アンケート質問1「生徒は楽しんで学校に通っている」、質問2「中学部の教育に満足している」という生徒、保護者の評価は、常に高い割合であるが、課外活動の充実がその要因であると思われる。 ●学級活動、委員会、クラブ等を通じて自主自律の精神の涵養をめざしている。また、生徒たち自身がそれを実感できるよう種々の方策を講じている。 ●クラブ入部率は各学年95%以上であるのは従前どおりである。 ●学習とクラブ活動の両立を図るため、定期試験中およびその1週間前はクラブ活動を停止している。また、家庭を中心とした幅広い体験ができるよう、夏期休暇中はクラブ活動を18日とし、冬期休暇中はクラブ活動停止としている。 ●成績不振者は、学級担任の指導によりクラブへの参加を一定期間停止させ、学習時間の確保を図っている。 		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ●自治活動・課外活動の充実は、従前どおり、今後とも継続的に行う。 ●成績不振者にとってクラブ活動が学習の妨げにならないよう、その参加形態のあり方について検討していく。 		

評価項目 【テーマ】	生徒指導 【基本的生活習慣の確立】	自己評価	A
目標	挨拶や時間厳守などの基本的社会マナーの指導／整理整頓や環境美化の指導		
具体的な取組の 状況とその効果 に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ●挨拶、時間厳守、身だしなみ等の基本的社会マナーについては、生徒指導部を中心に全教員で重点的に指導している。 ●基本的社会マナーについて、生徒・保護者ともに肯定的回答の割合が高い。今年度は教員の肯定的評価が69.4%と少し低くなった。原因の一つに、登下校時など教員の目が届きにくい場面での指導が若干増加したことが挙げられる。 ●肯定的回答が低く課題となっている教員アンケート質問13「整理整頓や環境美化に努めさせている」の項目は、今年度も昨年同様に低い評価にとどまった。「ポスター委員会」を組織し、生徒の作成したポスターを掲示することで美化意識の啓発活動を行っている。今年度は新たにチェックシートをつくり、風紀美化委員がそのシートに基づいて掃除のチェックをするという試みを行った。しかし多くの場所を管理人の方々に掃除してもらっているなかで、生徒に美化意識を持たせるのは難しい。 		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ●基本的社会マナーについては今後も全教員で粘り強く重点的に指導していく。 ●整理整頓や環境美化の指導については、今年度試みた定期的チェックを生徒会と教員が連携してより効果的なものに改善していくこととする。 		

評価項目 【テーマ】	生徒指導 【自主自律の精神の育成】	自己評価	A
目標	HR（学級活動）における自主自律の精神の育成／学校行事における班活動などを通じた自主自律の精神の育成		
具体的な取組の 状況とその効果 に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ●各行事において、生徒会役員がリーダーとなり委員会を組織してその企画・運営を自主的に行っている。各行事の実行委員会は募集人数を大幅に超えて委員の応募があり、積極的に取組む生徒が増えている。 ●代議員会および各委員会活動の活性化に重点を置き、生徒会活動およびHR活動を中心に自主自律の精神を育てている。 ●保護者アンケート質問11「生徒の自主自律の精神を育成している」では肯定的評価が89.3%と高い。教員アンケート質問14「クラス担任は、学級活動において生徒の自主自律の精神の育成に努めている」も肯定的評価が80.5%と高い。それに比べて生徒アンケート質問7「自分たちの手でホームルームや生徒会などの自治活動を行っている」は肯定的評価が73.5%とやや低めになっている。これは活発に自治活動を行っているのが、中心となる一部の生徒に限られていることが原因と考えられる。 		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ●今後も各行事において、生徒会役員がリーダーとなり委員会を組織して、その企画・運営を自主的に行わせ自主自律の精神を育成していく。また、全生徒がその活動に関われる仕組みづくりを検討する。 ●生徒会・委員会活動をさらに活性化し、生徒に自ら判断し行動できる力を身につけさせる。 ●今年度より置いている複数年生徒会を担当する教員の権限を拡げ、活動の継続性を高め活性化する。 		

評価項目 【テーマ】	生徒指導 【問題行動への対応】	自己評価	B
目標	生徒の問題への対応についての教員間での共通理解／生徒の問題行動の早期発見／問題行動に対しての適切な指導・訓戒		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ●生徒の問題行動に対しては、「迅速・適切・誠実」を念頭におき、当該学年団と生徒指導部が密に連携しながら対応している。 ●教員アンケート質問 15「生徒の問題への対応について教員間で共通理解がある」の項目で肯定的回答が毎年低下していた。教員数が増えたことで教員間のコミュニケーションが難しくなったことが背景となっているため、今年度より情報共有フォルダーを作成し指導案件の報告をきめ細かに行ってきた。このため教員の肯定的評価が昨年度の 51.3%から 66.6%まで上がった。 ●「問題行動などについて適切に対応している」の項目では、生徒と保護者の肯定的評価が昨年とほぼ変わらず高いのに対し、教員は 86.5%から 77.8%に下がっている。今年度、目が届きにくい場面での生徒への指導を若干強化した。結果、より適切な対応について教員が考える場面が増えたことが原因と思われる。 		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ●教員間での「情報共有方法の構築」「生徒指導についての意思統一」について指導部内に検討会議を設けて対応策を策定し、現在試行を始め少しずつ効果を上げている。来年度は現在作成中の基本的共通理解のための教員用マニュアルを完成させ共通理解と意思統一を進めることとする。 		

評価項目 【テーマ】	保健管理 【心身の健康管理】	自己評価	B
目標	健康診断の定期的な実施と事後措置／健康状態の把握／健康相談／感染症の予防		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ●生徒たちが健康で安全な生活ができるよう、健康診断を実施し、事後措置・管理を行っている。また、定期的に学校医とのミーティングの場を設け、健康診断の事後措置をはじめ健康面で配慮を要する生徒についての指導・助言を受け、日常生活の指導に生かしている。 ●中学生であるこの時期は体の変化とともに心の変化、葛藤が大きく、心の不調から保健室に来室する生徒がいる。生徒一人ひとりを理解し、支援していくことは簡単にできることではないが、保護者、担任、学年主任、カウンセラー、養護教諭が情報を共有しながら、サポートできるよう努めている。 生徒アンケート質問 12「中学部は、自分の健康に関する情報を適切につかんでくれている」で肯定的評価が 78.3%、保護者アンケート質問 13「中学部は、生徒の健康に関する情報を把握し適切に対応している」で 90.1%の肯定的評価を受けた。教員アンケート質問 18「中学部は養護教諭、カウンセラー、教員間で情報交換や連携を適切に図り、生徒の健康状態の把握に努めている」においては 88.8%の肯定的評価という結果であった。 ●一方で生徒の心身の健康相談の場について、生徒アンケート質問 13「中学部には心や体の健康について相談する場所がある」と答えた生徒は 60.2%にとどまっており、サポートを要する生徒だけにとどまらず、他の多くの生徒たちにとって、もっと気軽に相談できる環境を整えることが課題である。 		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ●生徒の支援については引き続き、担任、学年主任、カウンセラー、養護教諭で情報共有しながら、サポートしていけるように努力する。 ●気軽に相談できる環境として、健康相談日を設ける。 		

	●今後も開かれた保健室をめざして、生徒たちが相談しやすい場所となるよう雰囲気作りに努めていく。
--	---

評価項目 【テーマ】	保健管理 【怪我・急病発生時の対応】	自己評価	A
目標	怪我・急病発生時の迅速で適切な対応		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	●怪我・急病発生時には迅速に、適切に処置が行えるよう努めている。また、病状の報告やその対応については保護者と連絡、相談しながら行うように心がけている。生徒アンケート質問 14「中学部は、怪我や体調不良の時に素早く適切な対応をしてくれる」で 84.9%、保護者アンケート質問 15「中学部は、生徒の怪我及び急病発生時には迅速で適切な対応をしている」で 91.8%の肯定的評価を得ている。		
今後の方策	●今後も怪我・急病発生時には適切な処置が行えるように努め、病状の報告や対応について保護者と連絡、相談しながら行っていく。 ●怪我をした際にはその要因を生徒と共に振り返り、怪我の予防について考えて生徒の意識を高めていく。		

評価項目 【テーマ】	保護者との連携 【学校運営についての保護者との協力状況】	自己評価	A
目標	P T Aと協力した学校行事の運営／教育内容に関する保護者との意見交換		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	●全校行事のサポートとして、文化祭で地区ごとに分かれての中学部グッズ・飲食物等の販売、マラソン大会でのスポーツドリンクの差し入れ、合格者招集日での中学部グッズ販売がある。その他にも、P T A聖書を学ぶ会、P T Aだよりの活動を展開している。 ●保護者アンケート質問 16「中学部は、行事の際に、適宜P T Aと協力してこれを実施している」で肯定的評価が計 96.0%と高い数値を示していることから、昨今、保護者のP T Aへの参加率の低迷が社会問題になっているにも関わらず、取組が評価されていると考えられる。		
今後の方策	●保護者との意見交換ができる時間を、今まで以上に設けるようにする。		

評価項目 【テーマ】	保護者との連携 【保護者との懇談の実施やP T Aとの協議会の運営状況】	自己評価	A
目標	P T A幹事会等の適切な開催／クラス担任と保護者との面談の実施／クラス・クラブ・委員会等の保護者との懇談の実施		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	●年5回の常任幹事会、幹事会を開催しており、五役会（役員会）は新しい懸案事項が出てくるたびに開催している。 ●年4回開催されるP T A集会では、全体集会の後に学年集会、さらにクラス集会で懇談をするようにして、保護者と担任が話をしやすい雰囲気をつくっている。また、クラス担任による保護者との面談も行っている。 ●運動部・文化部ともに、保護者と顧問、部員との懇親会や送別会などを、ほとんどのクラブで行っている。		
今後の方策	●これまで通り、保護者と多くの時間を共有しながら、共に考え、話し合える取組を継続していく。		

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育の実践 【キリスト教主義教育の理念の共有】	自己評価	A
目標	教員間でのキリスト教主義教育の理念の共有／キリスト教主義的人間理解を基にした日々の教育活動		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ●キリスト教主義教育は毎日の礼拝や聖書科授業を中心に全学的な教育プログラムとして展開している。また、クリスマスや花の日等の行事等を通してその理念を生徒、保護者、教職員が共有できるように機会を設けている。特に、保護者に対してはPTA集会の礼拝や「聖書を学ぶ会」等でキリスト教主義教育に接する機会を設けている。 ●生徒アンケート質問 15「日々の学校生活からキリスト教の精神が伝わってくる」の肯定的評価は 80.8%（昨年度は 82.8%）、質問 16「キリスト教に関する理解が深まっている」の肯定的評価は 76.6%（昨年度は 78.2%）、保護者アンケート質問 19「中学部は、キリスト教主義教育を適切に行っている」の肯定的評価は 94.2%（昨年度は 96.1%）といずれの数値も昨年度よりそれぞれ約 2%低くなっている。肯定的評価は継続的に高い数値ではあるが、昨年度より低くなった理由が何なのかを分析せねばならない。また、教員アンケート質問 25「教員間でキリスト教主義教育の理念を共有している」の質問に対する肯定的評価が 61.1%（昨年度は 62.1%）と昨年度より約 1%低くなっている。 		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ●関西学院の、そして中学部の建学の精神であるキリスト教の精神を大切に守り継ぎながら、時代に適応した新たなキリスト教主義教育のあり方を検証し、具体的な教育プログラムを展開していく。 ●教職員に対して、礼拝の機会だけでなく、理念を共有するための研修や関西学院内のキリスト教主義教育にかかわる行事等への積極的な参加を呼びかけていく。 		

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育の実践 【キリスト教主義教育の推進】	自己評価	A
目標	学校の重要な柱としての礼拝の遵守／生徒のキリスト教的人間理解を育成するためのプログラムの実施		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ●キリスト教主義教育の実践として、毎日の礼拝の時間を中心として、生徒と教職員がキリスト教精神に触れるプログラムが実施されている。 ●礼拝の奨励には教員に加え、学外の各分野からも多くの講師を招き、いのち、人権、平和などをテーマにした幅広い主題で話を聴いている。また、生徒たちが自主的に取組む毎月平均 6 回開催される生徒礼拝や毎週 1 回の早天礼拝も定着している。生徒たちが積極的に礼拝に対してかかわる姿勢が継続的に見られる。 ●生徒アンケート質問 17「礼拝では学内外の様々な人の話を聴くことができる」の肯定的評価は 93.8%（昨年度は 92.8%）と昨年度の数値より上がっている。生徒たちにとって毎日の礼拝での奨励は学びの場になっている。しかし、教員アンケート質問 26「中学部は、礼拝を重要な柱として守っている」の肯定的評価は 80.6%（昨年度は 89.1%）と今年度は下がっている。それに対し、質問 27「中学部は、生徒のキリスト教主義による人間理解を育成するためのプログラムを適切に行っている」の肯定的評価は 66.7%（昨年度は 64.8%）とわずかではあるが昨年度より上がっている。 		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ●いのち、人権、平和、道徳教育などのさまざまなテーマを考慮しながら、宗教運動や毎日の礼拝での奨励を通して学ぶことができるように、各分野で活躍されている講師を招き、話を聴く機会を計画する。 ●生徒たちの自主的な運営による礼拝をより充実させていく。 		

評価項目 【テーマ】	特色ある教育の実践 【読書・図書館教育】	自己評価	A+
目標	読書生活の推進と実態把握／図書館を活用した総合的・教科横断的な学習活動の展開／読書・図書館教育に特化した学校行事の実施		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ●設備の整った図書館の活用を勧めるだけでなく、中学部独自の推薦図書リストの作成、読書記録の推奨、国語科・読書科による授業前の10分間読書の実施などを通じて、読書習慣の定着を図っている。 ●読書科の授業を通じ、図書館の利用、情報の獲得・整理・活用・表現の方法や技術を学習している。 ●各省庁や法人・企業などから案内のある募集型のレポートや作文などについて読書科が窓口になり、広く生徒に情報を伝達し、生徒がどれかひとつは応募作品を提出する形で、文芸コンクールを実施している。各コンクールに応募した生徒の中から今年度も約30名の受賞者を輩出し、校内でも表彰を行っている。 ●読書・図書館教育については今回も高い評価が出た。肯定的評価を見ていくと、生徒アンケート質問19「読書に関するプログラムが充実している」で92.1%、保護者アンケート質問21「図書館を活用した総合的な学習プログラムを展開している」が89.8%、教員アンケート質問28「読書教育の推進と実態把握を適切に行っている」が91.7%と特に高い。また、この項目の特徴は、単に肯定的評価全体が高いだけでなく、「強くそう思う」という強い肯定評価が多いことである。 ●2年前に、唯一評価が芳しくなかった教員アンケート質問29「中学部は、図書館を活用した総合的・強化横断的な学習活動を展開している」の項目においても、肯定的評価が2015年度75.7%から2016年度83.8%、2017年度86.1%と高くなってきており、その取組が徐々にではあるが広がりを見せてきている。 		
今後の方策	●今後も、図書館を中心とした読書科の取組を軸に、クラス担任ともども読書教育に学校全体として関わっていく。		

評価項目 【テーマ】	特色ある教育の実践 【芸術教育】	自己評価	B
目標	音楽・美術を中心とした芸術教育による児童生徒の豊かな感性の育成／音楽・美術を中心とした芸術教育による児童生徒の自己表現能力の育成		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ●通常の音楽・美術の授業に加えて、秋に行われる文化祭では、各クラスが合唱や器楽演奏を披露する音楽コンクールや学年ごとにテーマを設定し生徒全員が作品制作に取り組む美術展などを開催している。 ●2年前は、この項目は生徒の肯定的評価が70%に満たなかった。その原因として、それまで行われていた文化祭での合唱コンクールが、共学化や生徒増などの影響で、縮小されたことが考えられる。2016年には、音楽科の新たな提案により、合唱コンクールが音楽コンクールというそれまでと違った形で開催されることになり、今年度はその2年目として成果が徐々に現れてきている。 		
今後の方策	●生徒の肯定的評価も徐々にではあるが上がってきている。それでも保護者や教員に比べれば割合が低い。これは、以前の12クラス編成の時は1クラス2曲の歌が披露できていたが、時間的、場所的問題もあり、18クラスになって1曲しか歌えなくなったことに対するマイナス評価が一因だと考えられる。今後、改善の可能性を模索していく必要がある。		

評価項目 【テーマ】	特色ある教育の実践 【キャンプ・体験的学習】	自己評価	A+
目標	キャンプ・体験的学習の、教員全員・学校全体による実施		
具体的な取組の 状況とその効果 に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ● キャンプ・体験学習は中学部が長年大切にしてきた伝統的行事の1つである。1年生時は入学直後の千刈オリエンテーションキャンプ（2泊3日）、2年生時は関西学院が所有している岡山県にある無人島の青島でのキャンプ（4泊5日）、3年生時は修学旅行（4泊5日）と、各学年特徴的な校外宿泊行事を設けている。 ● 1、2年生時の飛鳥・奈良市街での校外学習、3年生時の修学旅行では、事前に生徒に行動計画を練らせ、班行動を中心とした自主研修も組み入れている。 ● 毎年この項目についての評価も非常に高いが、今年度は生徒、保護者、教員三者ともに、肯定的評価が90%を超えている。 		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ● 青島キャンプにおいては現行4泊5日という期間を5泊6日で展開できないか検討中である。 ● 修学旅行では、長崎において被爆された方々から直接お話をうかがうプログラムを毎年入れてきたが、講師の方々の高齢化に伴い、このプログラムの継続が危ぶまれている。今後このプログラムをどのようにしていくかが課題である。 		

（自己評価）

A+=テーマに対する目標を達成した。

A=テーマに対する目標を概ね達成した。

B=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行しているが、達成にはまだ時間がかかる。

C=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行していない。

総合評価

- 中学部では日々の授業を最も大切にしており、生徒の知性と感性に響く、高いレベルを維持しながらも、わかりやすい授業を行うことを追求している。そのために様々な自主教材の開発、客観的な視点から見るための外部テストの活用、同時に以前からの学力推移調査や英語のGTEC、体育の運動能力テストなどを通じて、生きる力となる学力、そして人間力をつけさせることを、今後も大切に考えて取組んでいきたい。社会人として大事なものは、人間力の最高峰としての誠実さであり、それを揺るぎないものにするために、日々の学習と生活習慣を、よりしっかりとしたものとして生徒に根付かせていきたい。
- 中学生としての生活において、正規の授業以外に重要な部分を占める、自らが選択した課外活動では、今年度も多くのクラブが成果を上げてきた。それぞれの活動の更なる充実により、生徒たちが高い目標を持って学校生活を前向きに送ることができるように今後も引き続き環境を整えていきたい。
- 生徒指導面に関しては、2012年度から生徒数も増え、男女共学ということもあり、様々な細かい配慮がより必要となっている。今年度からはサポートルームを設置して、教員、養護教諭、カウンセラー、支援員をその担当者として配置した。これからもお互いに情報交換して、生徒にとって居心地の良い、一人ひとりの居場所を大切にできる学校づくりをめざしていきたいと考える。
- 伝統的なキリスト教主義の実践について、中学部が守ってきた、毎日欠かすことのない礼拝を大事にしている姿勢が生徒たちにも伝わっている。そのことを、当然これからも中学部の柱として守ってきたい。
- 特色ある教育の実践としては、読書、図書館教育において、大学生や社会人になっても通用する、将来を見据えての課題研究の学びが常に実践されている。生徒たちの主体的な学びの成果は、長い時間をかけて完成する文字数2万字にせまる卒業レポートのみならず、社会の中で評価を受ける文

芸コンクールにおいても多数の表彰者を出していること、及び肯定的評価が90%を超えていることからわかる。さらに自然の中での千刈オリエンテーションキャンプや飛鳥・奈良市街での校外学習、3年次の長崎での修学旅行における実際の被爆者から学ぶ平和学習などの本物との出会いを通じて、より生徒たちが人間的に成長できる学びを、これからはしっかりと続けたいと考える。生徒たちには、これからは原爆の悲惨さをしっかりと語り継ぐことができる若者たちであってほしいと願う。

- 中学生時代の3年間は、生徒たちが様々な壁にぶつかりながらも、大きく成長する時期である。良いところは思いきり褒めて、間違いがあれば本気で向き合っ、共に成長できるように努めたい。中学部は盛りだくさんの、ある意味ハードな教育であるが、困難や苦勞を乗り越える経験も、人として生きるために大切となる。将来生徒たちが社会に必要とされる人間として生きていけるように、大人が本気でバトンを渡せる学校でありたいと考える。

2017年度の評価をふまえて2018年度に予定している評価項目、テーマ等

評価項目については、①教育課程・学習指導、②生徒指導、③保健管理、④保護者との連携、⑤キリスト教主義教育の実践、⑥特色ある教育の実践、以上の6項目を継続して取り上げ、課題をはっきりさせて取組みたいと考えている。

第三者評価／学校関係者評価

<教育課程・学習指導>

- 学習ガイドブックを作成し、生徒だけでなく全教員が共通理解のもと学習指導に取り組んでいることの効果は大きいと考えます。
- 学級担任だけでなく、当該学年担当者が情報交換会を実施していることで、教科、領域を問わず全教員が個別の生徒についての情報を共有できています。
- 様々な外部試験等の実施により、生徒の客観的な学力の把握に努め、日常の授業の工夫や改善が行われています。
- 教育課程編成を工夫し、基礎学力及び応用学力の向上を図るための授業時数の確保に努めています。
- 中学部の特色でもある読書科の取組により、生徒が読書に親しむ態度が形成されていると同時に、教科を超えた探求的な学習を行う力の育成が行われています。
- 応用的、発展的な学習、英語における分割授業、補習、学習指導会、定期試験前の学集会等の実施など、個々の生徒の学習状況にあわせた学力向上の取組が行われています。
- ほとんど(95%以上)の生徒がクラブ活動に参加しており、そこからも「感謝、祈り、練達」の教育理念の具現化を図ろうとする学校及び生徒の意欲や姿勢が分かります。併せて、クラブの活動停止期間を設けることで、学習との両立や他の幅広い体験につなげる工夫がなされています。

<生徒指導>

- 基本的な生活マナーについて、全教員で重点的に指導していることの意義は大きいと考えます。
- 生徒会活動が活発に行われており、各行事等も実行委員会を中心に積極的な生徒の関わりがあるように感じます。意欲を持った生徒による主体的な学校行事の運営や参加の状況がうかがえます。
- 問題行動については、「迅速・適切・誠実」を念頭に学年と生徒指導部さらに管理職が組織的に対応し、解決を図っています。

<保健管理>

- 学校医と定期的にミーティングを行い、連携を密にして生徒の日常生活の指導に役立てています。
- 身体面の変化だけでなく、心理的要因での保健室来室者が増加してきていますが、保護者、学校、カウンセラーが有機的に連携して対応するシステムの構築が進められていることは評価できます。生徒の多様なニーズに対して、相談体制をさらに充実することを期待します。

＜保護者との連携＞

- PTA役員会、PTA集会、クラス集会等、様々な機会を通じて保護者と多くの時間を共有するよう努め、保護者に学校への協力と学校理解を促す取組を工夫しています。

＜キリスト教主義教育の実践＞

- 毎日の礼拝、聖書科授業を学校の重要な柱として、キリスト教主義教育についての理解を深め、生徒の人格の完成にむけた取組が行われています。
- 保護者に対しても、「聖書を学ぶ会」等でキリスト教主義の理解が深まるよう努めています。
- 生徒礼拝や早天礼拝が定着し生徒が積極的に礼拝に関わろうとする姿勢がわかります。

＜特色ある教育の実践＞

- 整備された図書館を活用して読書科の授業が実施されており、読書習慣を定着させるとともに、様々な情報の獲得・整理・活用・表現の技能が高められています。
- 音楽・美術を中心とした芸術教育の充実によって、生徒の豊かな感性を育むよう努めています。合唱コンクールが音楽コンクールとなり、生徒の意欲的な取組が定着してきていると考えます。
- 各学年が工夫した特色ある体験活動が実施されており、事前の行動計画の作成や自主研修など生徒の自主性を尊重した取組となっています。
- 実際の体験を通じた学習では生徒の人間関係の構築や自主的に活動する態度の育成が図られています。
- 聖書科や社会科の授業をはじめ、全教育活動を通じて生徒の人権感覚を磨き、平和を希求する態度を育む取組が行われています。

中学部の学校生活の様子から、生徒の真剣な学習や生活の様子、そして教職員の生徒に対する本気度や熱意を強く感じることができます。

中学部では、文字数2万字にせまる卒業レポートの作成を行っていますが、書き上げたレポートだけでなく、それを書き上げる過程こそを大切に指導に当たっていることが分かります。その姿勢は中学部における学びの姿そのものであると考えます。

中学部が学校をあげて、将来の人格の完成に向けた人間力の育成に努めていることがうかがえます。

全体として、自己点検・評価が誠実になされ、改善への取組も概ね良好であることから、PDCAサイクルはうまく機能していると判断されます。なお個別の評価項目へのコメントは以下のとおりです。

＜教育課程・学習指導＞

- 教育課程・学習指導に関して、生徒・保護者ともに中学部の教育への満足度が高いことは高く評価できます。また生徒の学力差が広がるなか、基礎学力の定着と発展学習の両面に対応するために、補習や分割授業の実施等の取組がなされている点も評価でき、今後一層の充実が望まれます。しかしアンケート結果の分析でも指摘されているように、「教員が教育課程の全体を理解している」に対する肯定的評価が昨年度に比べ約20%も低下していることは気がかりな点です。学級経営、生徒指導、部活指導等多忙化する日常業務のなかで、全体を見渡すゆとりがないという状況はよく理解できますが、教育課程は中学部の教育目標達成の根幹であることから、教員間でより一層共通理解を図っていくことが期待されます。

＜生徒指導＞

- 基本的な生活習慣の確立、自主自律の精神の育成に関して、生徒・保護者ともに肯定的な評価が概ね高い点は評価できます。また本年度より「情報共有フォルダー」を作成し指導案件の報告をきめ細かに行う等の努力により、従来に比べ生徒の問題行動への対応について教員間で共通理解が深まったと評価されている点は高く評価でき、今後更なる工夫と継続が期待されます。

＜保健管理＞

- 生徒の健康状態の把握や怪我・急病発生時の対応に関して、生徒・保護者ともに肯定的な評価が

非常に高いことから、こうした面はうまく機能していることがうかがえます。また生徒の心身の健康状態に関して、養護教諭、カウンセラー、教員間で情報交換や連携が適切になされているとする評価が教員間で高いことから、生徒の心身の問題に関する情報共有や連携といった組織的対応が円滑に図られていることがわかり高く評価できます。なお「心身の健康について相談する場所がある」という質問への生徒の肯定的回答の相対的な低さは、自意識や羞恥心といった思春期心性の影響も大きいと考えられますが、今後生徒が気楽に相談できるような開かれた場所としての展開が期待されます。

<保護者との連携>

- P T A集会、学年集会、クラス集会や行事、また部活での懇談会や行事、クラス担任による保護者面談等を通じて、保護者とのきめ細かい連携・協力が図られており、これを裏づけるように、この点に関する保護者アンケートでの肯定的評価が極めて高く、保護者との連携はうまく機能していると高く評価できます。

<キリスト教主義教育の実践>

- アンケート調査の結果から、生徒や保護者に建学の精神であるキリスト教主義教育への理解が深められていることがよく分かり、高く評価できます。その背景として、生徒を主体とした多様な礼拝の工夫や設定、「聖書を学ぶ会」等による保護者への働きかけといった地道な努力が功を奏していると考えられます。ただ少し気になるのは、キリスト教主義教育の理念の共有に関して教員の肯定的評価がここ数年低下している点です。教育課程の欄でも触れたように、これは教員の教育課程全体の理解に関する肯定的評価の低下と連動したものと考えられます。今後教員間での理念の共有を図ることにより、キリスト教主義教育が教育課程の核として展開されることを期待します。

<特色のある教育実践>

- 礼拝、読書、青島キャンプや千刈キャンプといった体験学習等、中学部は従来から特色のある教育実践に取り組んでおり、こうした点は非常に高く評価できます。また他に類を見ない「読書科」については、活字ばなれが進む今日においてその意義は極めて大きいとともに、今求められているアクティブ・ラーニングを通じた教科横断的な汎用的能力の育成という面からも大いに期待される場所です。生徒が積極的に外部の募集型のレポートや作文等に応募し本年度は約30名が受賞したことは、読書科の指導を通じて教科横断的な汎用的能力の育成という面から非常に高く評価できます。また「図書館を活用した総合的・教科横断的な学習活動の展開」に関して教員の肯定的評価がここ数年高まっていることから、こうした学習活動への積極的な取組の一端が見て取れ、高く評価できます。

6項目の評価対象を中心にとてもしっかりと自己点検がされていると思います。特にキリスト教主義教育の実践では日々の地道な礼拝を土台に様々な教育的配慮がされています。また特色ある教育の実践では、新入生オリエンテーションキャンプで行われる泥まみれになりながらラグビーをするメチャビーや、2年生時の無人島キャンプなど、関学ならではの試みが非常にうまくとりいれられているようです。今年度は授業を中心に見学しましたが、新校舎の特色を活かした取組が幾つか見られ、活気のある授業でした。

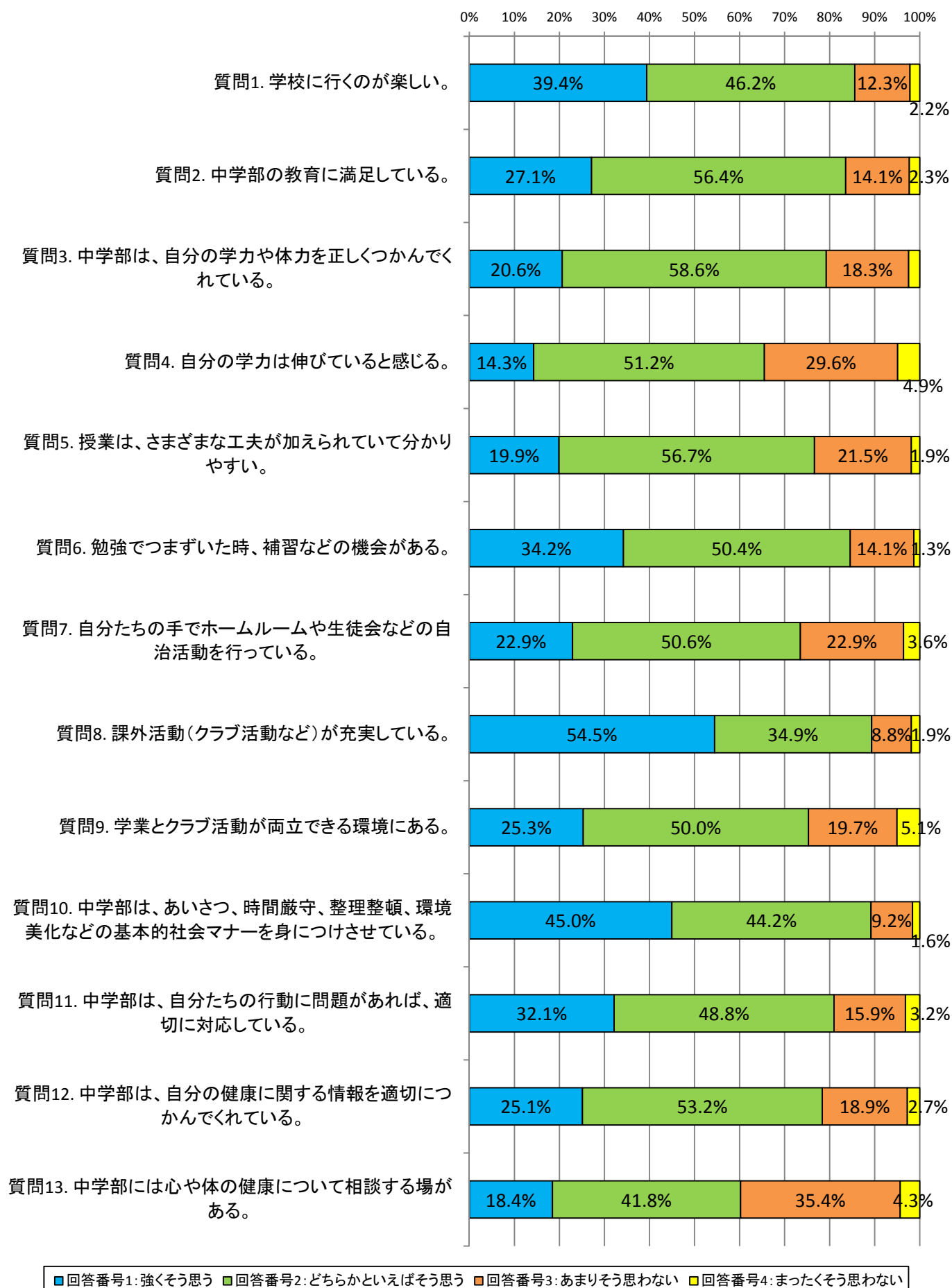
- 全体として、保護者・生徒の双方の中学部の教育への満足度が非常に高いことがうかがえます。特に中学部の特徴を表す「キャンプ・体験的学習」「読書・図書館教育」「キリスト教主義の実践」「保護者との連携」においては教員が自信を持って取り組んでいる安定の実践があり、保護者・生徒がそこに厚い信頼を寄せていることがアンケート結果に表れています。
- 学習活動においては、以前より『学習ガイドブック』を作成して教科の枠を越えての共通理解を図っており、保護者・生徒の評価は高いですが、今年度、教員による「教育課程の全体を理解している」ことや「客観的な学力把握に努めている」への自己評価が昨年より下がっている原因については調査することが望まれます。教員の異動や他の業務における多忙さも関連しているのではないのでしょうか。生徒の学力に幅が出ており、到達度の低い生徒が増加傾向とのことでありま

すが、これはおそらくどこの学校現場においても課題であり、「習熟度別授業」もひとつの解決策であるかもしれませんが、Differentiation という概念を取り入れた研修等の検討も望まれます。

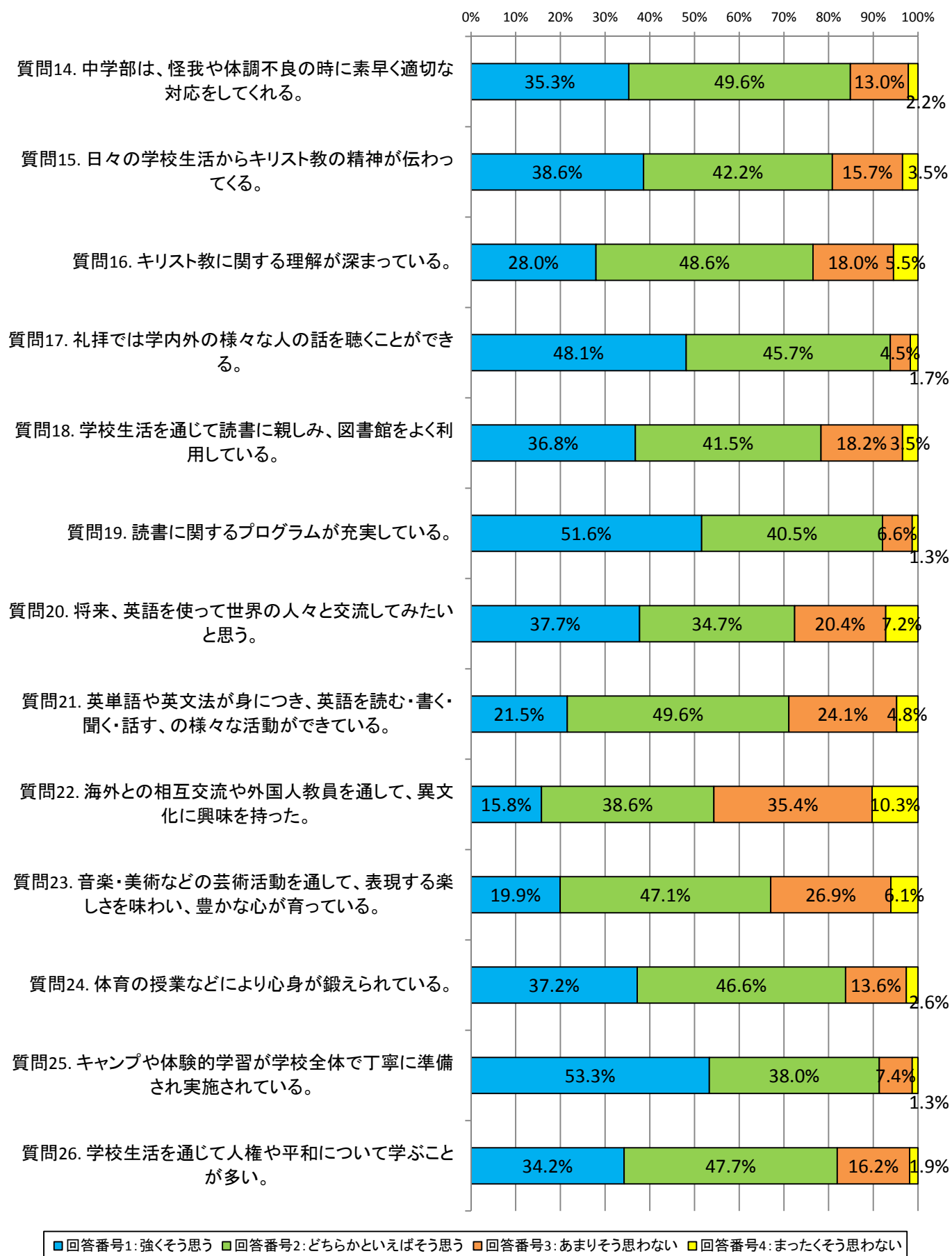
- 生徒指導に関しては、過去のアンケート回答の低下傾向を見て今年度新たな取組「情報共有フォルダー」を実践されたことは大いに評価できます。成長が著しく変化の大きい中学生の情報を教員間で共有する方法としてのこの実践については是非参考にしたいと思います。
- 「探究学習」ということばが一般的となる遥か以前から「読書科」を設けて、図書館の利用、情報の獲得・整理・活用・表現の方法や技術を学習しておられるプログラムが一層発展しており「総合的・教科横断的な学習活動の展開」につながっていることも素晴らしい教育実践であると考えます。
- 最後に、重点項目には含まれませんが、教員アンケートの「高等部との連携」と「国際理解の感性を育成するプログラム」に関する回答が低く出ている点に関して、高中部の会議や協議を進めている中で、「読書科」プログラムを持つ中学部とSGHとして4年目の実績のある高等部が一層の連携を進めることを期待します。

2017 年度学校評価

2017年度 学校評価アンケート集計結果
 中学部・生徒 質問1～13 (回収率 96.9% 694人/716人中)

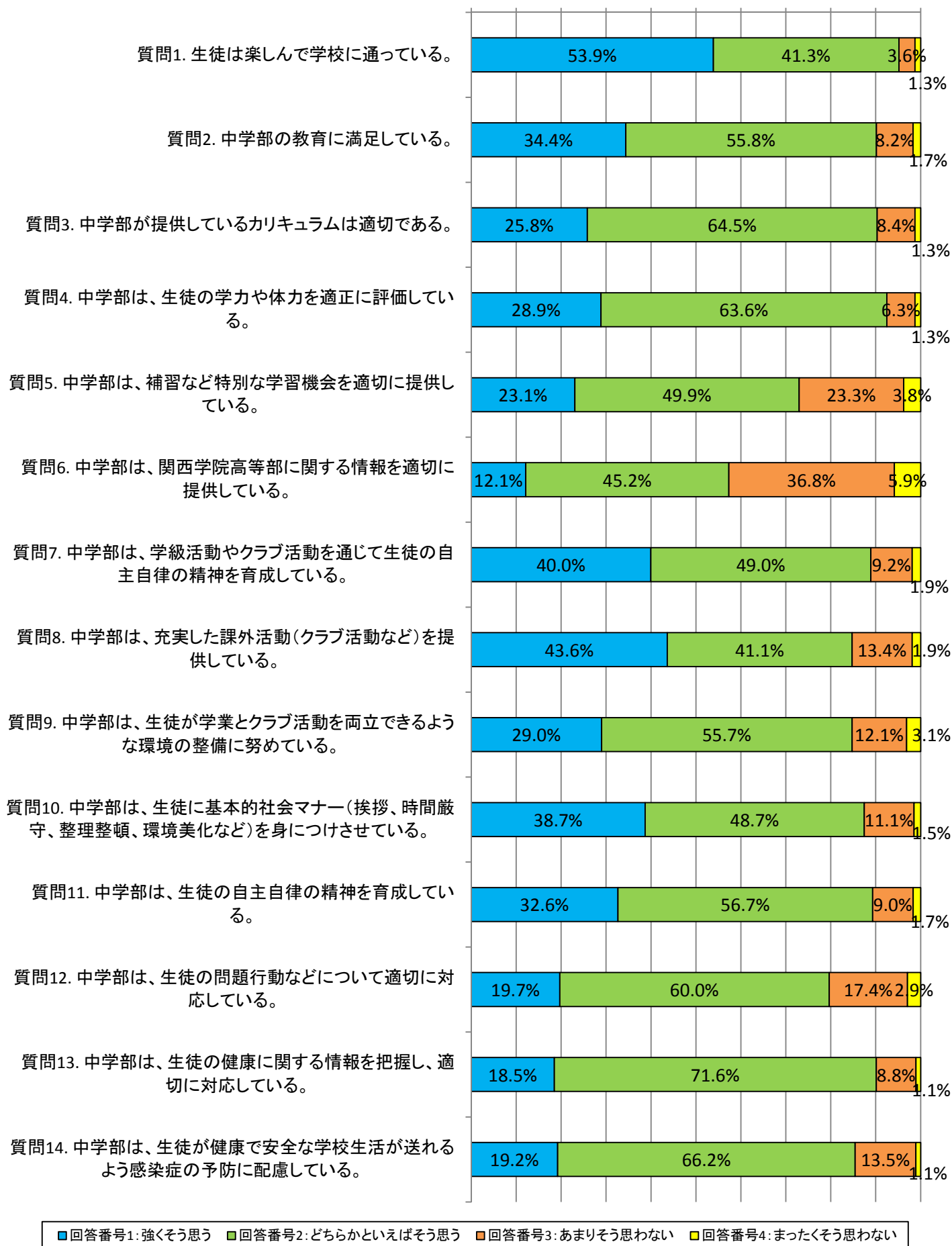


2017年度 学校評価アンケート集計結果
 中学部・生徒 質問14～26 (回収率 96.9% 694人/716人中)

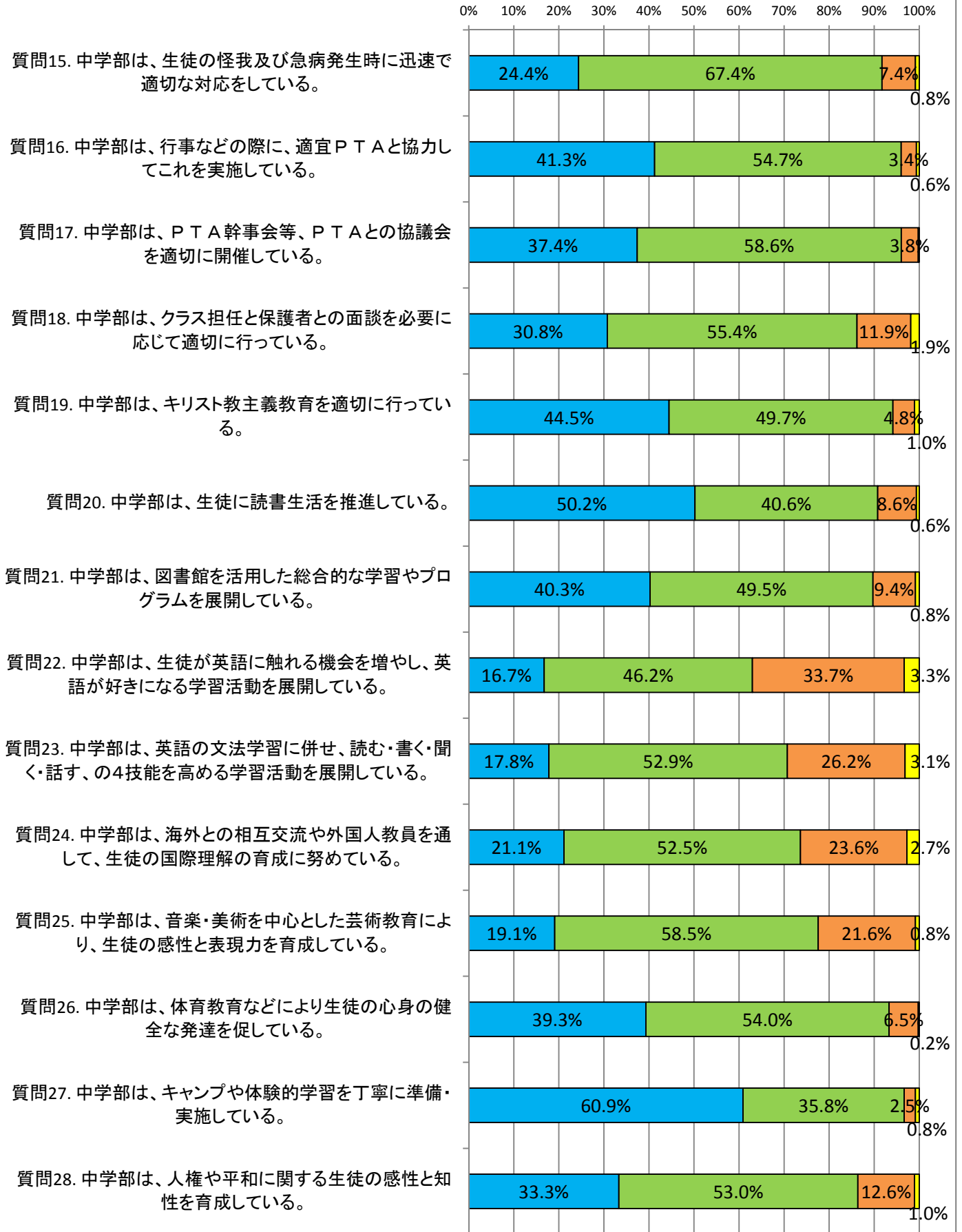


2017年度 学校評価アンケート集計結果
 中学部・保護者 質問1～14 (回収率 66.9% 479人/716人中)

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%

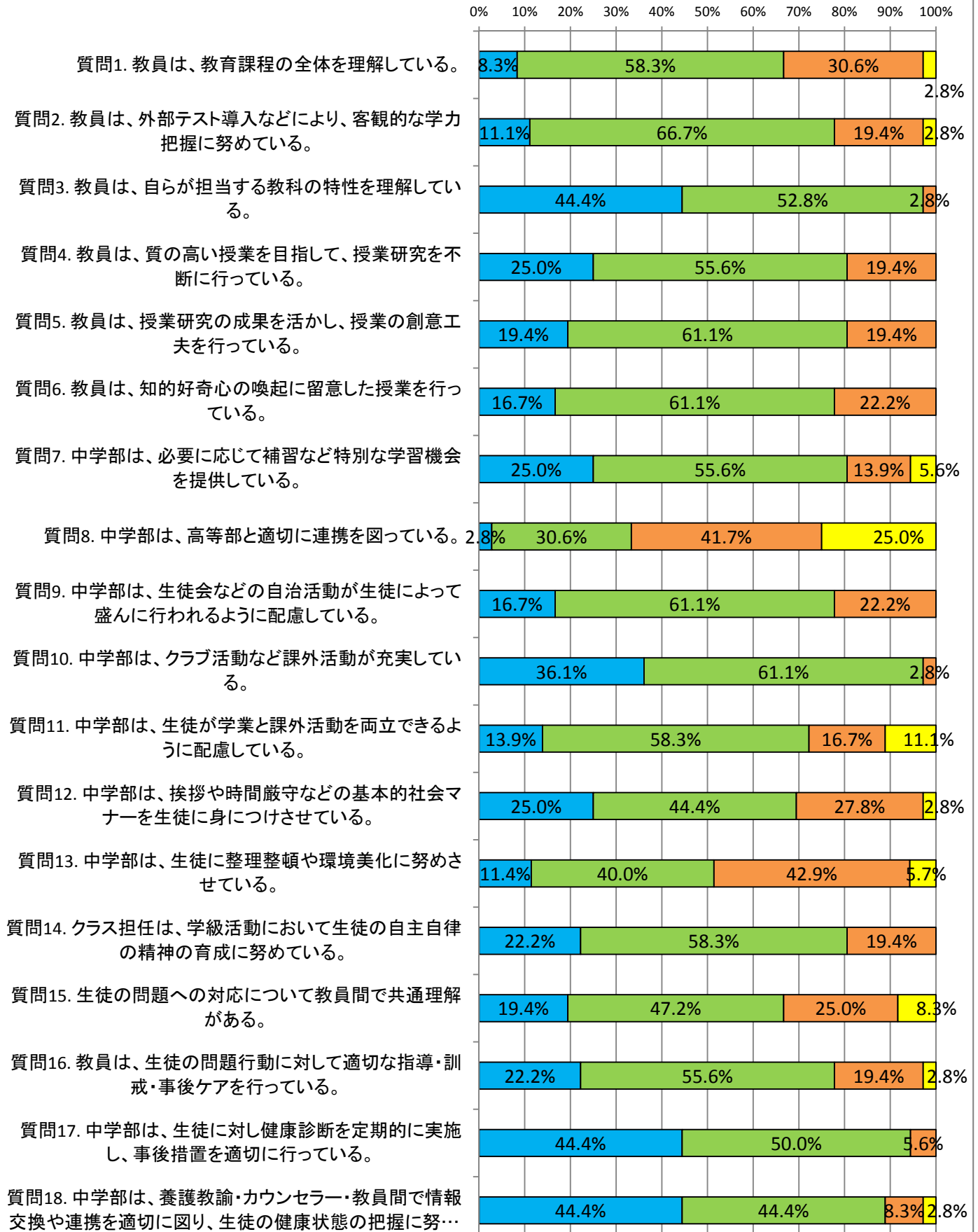


2017年度 学校評価アンケート集計結果
 中学部・保護者 質問15～28 (回収率 66.9% 479人/716人中)



■回答番号1: 強く思う ■回答番号2: どちらかといえば思う ■回答番号3: あまりそう思わない ■回答番号4: まったくそう思わない

2017年度 学校評価アンケート集計結果
 中学部・教員 質問1～18 (回収率 100% 36人/36人中)



■回答番号1: 強くそう思う ■回答番号2: どちらかといえばそう思う ■回答番号3: あまりそう思わない ■回答番号4: まったくそう思わない

2017年度 学校評価アンケート集計結果
 中学部・教員 質問19～34 (回収率 100% 36人/36人中)

